

# 持続可能な社会の創り手を育む「地域の自然を活かした世代間交流」 —Sコミュニティセンター役員インタビュー調査より—

舟越 美幸\*

## 要約

本研究は、Sコミュニティセンターの年間を通じた「地域の自然や環境を活かした世代間交流」に着目し、役員インタビュー調査から、SDGs時代の地域の自然や環境を活かした世代間交流の意義を考察した。KJ法で分析し、①地域資源を活用した自然や社会に関する体験活動②双方向な関係性の構築③保育者や保育活動のサポート④地域の愛着を育てるコミュニティ・子育て環境づくり⑤QOLの向上・世代継承性の増加、のキーワードを得た。この活動は「地域の核」となるコミュニティセンタースタッフの先導により、地域に双方向な関係性を作り、安心感あるコミュニティ・子育て環境が整うだけでなく、スタッフ自身のQOLや世代継承性増加にも繋がる活動である。また、地域に愛着を持ち、自然や社会の知識を学び伝承するSDGs達成のために有効で重層的な活動であり、保育者を支え、地域に保育を根付かせる活動であることが分かった。

キーワード：SDGs, 世代間交流, 地域資源を活かした保育・幼児教育, コミュニティセンター, 環境構成

2024年1月9日受理

## I. 問題と目的

2015年9月、ニューヨーク国連本部「国連持続可能な開発サミット」において、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、人間、地球及び繁栄のために必要な2030年までの行動計画として17の目標と169のターゲットから成る「持続可能な開発目標（SDGs）」が掲げられた<sup>1)</sup>。この目標達成のため、2016年12月に発表された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」は、ESD（持続可能な開発のための教育）は、「時期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である」とされ、幼児期から持続可能な社会の創り手を育むことを求めており<sup>2)</sup>、本研究は関連が深い両者の先行研究を参考にする。

これらに関連する保育・幼児教育の先行研究には、領域「環境」におけるねらいや内容にESDの視点が含まれるとしたものや<sup>3)</sup>、SDGs時代の領域「環境」は、「地域社会の行事や伝統文化に触れる機会を多く作ることで、達成される」<sup>4)</sup>と述べられた文献が存在

し、SDGsが掲げる17の目標にある「自然」「教育」「まちづくり」「動植物」と、領域「環境」の自然や環境、生活や文化、地域社会や伝統は、共に自然や環境のみならず、人や社会（生活や文化）、地域、教育との関係性や共生を問い直す視点が存在する。

また、持続可能な社会を創る教育は、自然体験と社会体験を結びつけ、地域を学びの場とすることや<sup>5)</sup>、「ESD＝地域に根差した保育」として、「保育が地域に根差すにはどうしたらよいのか」に着想を変換し、地域コミュニティを形成する者の土地の愛着を促すことが重要だと考えられている<sup>6)</sup>。今回の教育改革<sup>注1)</sup>にあたり、幼稚園教育要領解説<sup>7)</sup>や、保育所保育指針解説<sup>8)</sup>は、保育者が家庭・地域と連携・協働し、地域の自然、高齢者や異年齢の子ども等を含む人材、行事、施設等の地域資源の積極的な活用を求めている。

一方、環境教育は、ESDの誕生で単に環境問題の解決を目指すものではなく、乳幼児期から「自然があってこそ社会や経済が成り立ち、自分自身もそのなかに関わりあうものとして存在しているという環境観」、つまり、「自然と共生する社会」を基盤に社会

\*大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

の豊かさや発展を願う環境観を育むことが重要である<sup>9)</sup>。また、「自然体験学習は環境教育の目標達成に不可欠で有力な方法と共通の認識がある」ことから、その実現のため、保育者がファシリテーターとして、子ども参画型の自然体験保育を行うことや<sup>10)</sup>、「ESD・SDGsを広めるためにも今後幼少期からの十分な自然体験が一層重要であり、園庭や地域資源<sup>注2)</sup>を組み合わせた環境構成が必要である」<sup>11)</sup>と考えられている。つまり、保育・幼児教育におけるSDGsは、保育者が地域の人的資源と積極的に連携・協働体制を図り、地域の自然体験を基盤とする生活や文化等も含めた保育環境を構成することで、子どもたちが様々なヒト・モノ・コトに自発的に関わり、「自然と共生する環境観」や、その土地や暮らす人々に愛着が持てるよう、園を地域に根差すことが重要であると考えられる。

本研究のテーマとなる地域資源、Sコミュニティセンターの「自然を生かした世代間交流」については、領域「人間関係」において、地域の人々や高齢者、地域の人々と「世代間交流」を推進するよう明記されている<sup>12)</sup>。また、その意義について、保護者は知育と徳育、保育者は高齢者の優しさ等の徳育に有効であると認識する等、プラスの側面が大きいことや<sup>13)</sup>、高齢者の健康感や生きがい感、QOLの向上や世代継承性(Generativity)の増加をもたらすなど<sup>14)</sup>、重層的で有意義な活動であることが明らかになっている。しかし、地域資源を活かした活動が保育実践へもたらす利益や、具体的な効果が示されておらず<sup>15)</sup>、地域の高齢者が自然の知恵を与え、子どもから元気をもらうような新しい子育てに価値を置いた研究や実践の構築が重要だが進んでいないと考えられている<sup>16)</sup>。

上記の内容を踏まえ、CiNiiで「SDGs」「ESD」「自然」「環境」「世代間交流」「三世代交流」「保育」「幼児教育」「地域資源」をキーワードに検索したところ、地域の自然や環境を活かした世代間交流に関わる高齢者から意識調査を行った文献は見当たらなかった。そのため、好循環が成立する保育実践に着目し、その活動意義について調査を行うことは、SDGsの目標達成には不可欠であり、その実態を明らかにする意味は大きい。そこで、本研究は、Sコミュニティセンターの「地域の自然や環境を活かした世代間交流」に視点を置き、代表者にインタビューを用いた意識調査を行い、その意義を明らかにすることを目的とする。

## II. 対象と方法

### 1. 研究の概要

#### (1) 対象施設と活動内容

本研究の対象となる、Sコミュニティセンターは、出雲平野の東部の田園地帯に位置し、近くに宍道湖や出雲空港の発着地が存在する。Sコミュニティセンターが行う「地域の自然を生かした世代間交流」は、社会福祉協議会等から活動費の補助があり、地域の高齢者のボランティアによって「下表1：年間活動計画<sup>注3)</sup>」に示すように、「シジミ採り」「さつまいもの苗植え、栽培、収穫、焼き芋作りと販売」等が年間を通じ運営されている。本活動は来年度から地域の同じ小学校に入学する、同地区の幼稚園1園と保育所2園の、計3園（以下三園と記す）の保育者や幼児を招き、継続的な交流が行われている。

表1：年間活動計画

4月 第一回理事会・総会	10月 サツマイモの芋ほり
5月 サツマイモの苗植え	11月 文化祭：焼き芋づくりと販売
6月 第二回理事会	12月 しめ縄づくり
シジミ採り会場整備作業	1月 大豆の刈り取り・豆たたき
シジミ採り	2月 味噌作り
9月 しめ縄づくり用わら準備作業	

#### (2) 協力者と調査方法

本研究にあたり、2022年6月、ボランティアスタッフ役員の中から責任者・副責任者の三名（Aさん・Bさん・Cさん：下表2）に半構造化インタビュー調査を依頼した。Aさん・Bさん・CさんはS地区の民生委員・社会福祉協議会理事を兼務され、各9年、3年、6年となる。

表2：インタビュー調査の対象者

	役員歴
Aさん	民生委員（社会福祉協議会理事兼務）歴9年
Bさん	〃 3年
Cさん	〃 6年

インタビュー調査当日は、Sコミュニティセンターの一室で、筆者と対象者3名が同席し、『「地域の自然や環境を活かした世代間交流」がどのような意義を持つと考えているか』について、一人ずつ話を聞く形で行った。また、その内容を、ICレコーダーで録音（全長1時間15分）し、本研究に該当する内容を逐語録とし

て文脈抽出後にコード化した後、語りの内容について、KJ法を用い、カテゴリー別に分類後、質的内容分析を行った。尚、会話にある「コミセン」は、コミュニティセンターの略称として使用されている。

### (3) 研究のプロフィール

本研究のプロフィールとして、6月活動「シジミ採り」の概要を下記に記す。

#### ①地域の保育所・幼稚園の参加者

「シジミ採り」活動の参加者数(下表3)は、A幼稚園は幼児19名、保育者5名計23名、B保育園は幼児26名、保育者5名計31名、C保育園は、幼児24名、保育者4名計28名、参加した幼児はいずれも年長児(5歳児)である。一方、ボランティアスタッフは、Sコミュニティセンターの社会福祉協議会理事・評議員、H漁協漁師から計20名の人員が配置された。

表3：シジミ採り参加者数

	幼児	保育者数	合計
A幼稚園	19	5	23
B保育園	26	5	31
C保育園	24	4	28

#### ②保育活動費等の補助

この自然体験の活動費として幼児・保育者は参加費一人200円を負担するが、各園から渚公園に移動するバス代については、I市社会福祉協議会の総合支援事業(赤い羽根共同募金や市民からの寄付金)が充当され、シジミ代はH漁業(シジミ部会)から無償提供されている。

#### ③当日の日程及び活動内容や様子

当日は、下表4に示すように、朝9時にボランティアスタッフは集合、バス到着までシジミ採りを行う宍道湖(なぎさ公園)に幼児の膝丈の水位が確保できる領域にロープを張り、活動範囲を明確にし、安全への配慮を行っている。

表4：「シジミ採り」当日の日程

9:00	環境整備(安全確保のためのロープ設置) ボランティアスタッフ打合せ
9:45	バス到着(三園の保育者と園児が乗車)
10:00	始まりのあいさつ・ボランティアスタッフ紹介 漁師の方からお話し ・ヤマトシジミの特徴 ・シジミ漁の方法とデモンストレーション ・海洋ゴミと生態系 宍道湖七珍の紙芝居「スモウアシコシ」 (東中学校美術部制作) シジミ採り
11:00	終わりのあいさつ・保育者や園児から感謝の言葉
11:20	バス出発

9時45分に、三園からバスが到着後(図1)、10時に全員で始まりの挨拶やボランティアスタッフ紹介、安全の諸注意があった(図2)。その後H漁協の漁師から、ヤマトシジミの生態・海洋ゴミと宍道湖の生態系の話、シジミ漁法のデモンストレーション、ボランティアスタッフによる宍道湖七珍「スモウアシコシ」<sup>注4)</sup>の紙芝居が行われた(図3・4)。

その後幼児たちは他園の子どもや保育者、ボランティアスタッフも含め、多くの人と関わりながらシジミを採集し(図5-7)、採り終えた後は、振って音を鳴らしたり、宍道湖で遊んだりしながら(図7・8)、笑顔を交わし遊ぶ姿が見られた。この間、ボラ



図1：バスの到着



図2：始まりのあいさつ・ボランティアスタッフの紹介

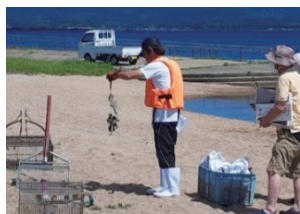


図3：漂着ゴミや生態系の話・シジミ漁デモンストレーション



図4：地元中学校美術部が作った「スモウアシコシ」紙芝居



図5：リスク管理のためのロープ設置と見守り



図6：ボランティアスタッフと触れ合う様子



図7：採集したシジミを見せたり、音を出したりして遊ぶ



図8：シジミ採りを十分楽しんだ後、宍道湖と遊ぶ

ンティアスタッフは、安全確保のために張ったロープ前や、活動領域内に等間隔に立ち、常に幼児の安全についてリスク管理を徹底しており（図5）、11時の終わりの挨拶で感謝を伝え合い終了した。

## 2. 倫理的配慮

倫理的配慮として、Sコミュニティセンター専門部に所属する3名の役員、幼稚園・保育所には研究の目的を伝えた。また、個人情報保護のため、園名や人物名等について特定できないよう全て、アルファベット表記とすることや画像の使用について、倫理的な配慮を行うことを伝え、承諾を得ている。

## Ⅲ. 結果と考察

KJ法による分析の結果、5項目の大カテゴリー、4項目の中カテゴリー・27項目の小カテゴリーを抽出した（次頁表5）。以下、抽出した大カテゴリー5項目別に結果と考察を記し、中カテゴリーを〈〉、小カテゴリーを〈 〉で表記する。また、その際根拠となった特徴的な語りを、四角（□）内に示し、キーワードとなった文節を下線で表す。

### 1. 地域資源を活用した自然や社会に関する体験活動の提供

ここでは、中カテゴリー〈幼児〉〈保育者〉の2項目、中カテゴリー〈幼児〉の中に、〈農業・漁業〉〈環境保全・生態系〉〈五感を通した自然体験〉〈調理・表現活動や社会に関わる保育環境〉の4項目、〈保育者〉の中に〈若い保育者〉〈保育者集団〉の2項目、〈保護者〉の1項目を抽出した。

語り1：

シジミ漁師さんの話は難しい言葉もあるけど、一つでも二つでも覚えてほしいと思っています。あと宍道湖や宍道湖七珍にしても同じような思いがあります。特に最近では漂着ごみが宍道湖にも流れてくるから、子どもたちが家に帰ってから親にも話して、

語り2：

文化祭で大きな畑で植えたサツマイモを焼き芋にするんだけど、サツマイモの苗を植えた後は、特に丁寧な水まきが大切、根がしっかり張るからね。散歩の時にペットボトルに水入れて行って、サツマイモの水撒きしてくれてる。

「語り1・2」からは、この活動は、地域の人的資源である高齢者から地域の同じ小学校に通う〈幼児〉が〈農業・漁業〉や、地域に根差した〈環境保全と生態系〉を体験的に学ぶことで、地域の環境観や自然の知識が伝承される保育環境が構成されていると考えることができる。また、「語り1」内の下線「子どもたちが家に帰ってから親にも話して」からは、この活動を通じて幼児が見聞きしたことを〈保護者〉に伝え、保護者も地域の環境観やこの活動に関心を持つことが期待されていることが推察できる。

語り3：

毎年一緒、最初はシジミを採るけど、後は宍道湖の水で遊びますけんね、汽水湖だからなめるとしょっぱいですよ。

語り4：

年中さんが冬に収穫した大豆で味噌を作って、年長の夏にシジミ採りした後の味噌汁作りに使いますよ。だから、味噌づくりは年中さんがする。

語り5：

明日は、子どもたちが絵を描いて、廊下とかに貼っておられて、その絵を文化祭に展示したりね

また、本稿で保育のカリキュラムと比較することはできないが、この〈五感を通した自然体験〉（語り3）から得た幼児の興味や関心が、その後の〈調理・表現活動や社会に関わる保育環境〉（語り2・4・5）の構成に活かされるよう配慮されていることが推察できる。

語り6：

若い保育者さんなんかも、園外学習になるんじゃないかな。シジミなんてものは、普段パックにグラム何百円で売っているものだから。

語り7：

先生方も実際に宍道湖に入ると体験は、なかなかない、本当に貴重な体験だと思うし。毎日園で遊ぶのも大変だから、野外活動あるといいと思うね。

表5：インタビューのカテゴリ抽出の結果

大	中・小カテゴリー	インタビューから引用された文節	
体験活動を地域資源を活用した自然や社会に関する	幼児	農業・漁業	・サツマイモを植えた後は、特に丁寧な水まきが大切、根がしっかりと張るけんね ・散歩の時にペットボトルに水入れて行って、サツマイモの水撒きしてくれてる ・シジミ漁師さんの話は、難しい言葉もあるけど、一つでも二つでも覚えてほしいと思ってます
		環境保全・生態系	・最近では漂着ゴミが宍道湖にも流れてくるから、子ども達が家に帰ってから親にも話して
		五感を通した自然体験	・毎年一緒、最初はシジミを採るけど、後は宍道湖の水で遊びますけんね ・汽水湖だからなめるとしょっぱいですよ
	保育者	調理・表現活動や社会に関わる保育環境	・文化祭で大きな畑で植えたサツマイモを焼き芋にするんだけど ・年長の夏にシジミ採りした後の味噌汁作りに使うんですよ ・明日は、子どもたちが絵を描いて、廊下に貼っておられて、その絵を文化祭に展示したりね
		若い保育者	・若い保育者さんなんか、園外学習になるんじゃないかな ・シジミなんてものは、普段バックにグラム何百円で売っているものだから
		保育者集団	・先生方も実際に宍道湖に入らって体験はなかなかない本当に貴重な体験だと思うし ・毎日園で遊ぶのも大変だから、野外活動あるといいと思うね
保護者	・若いお父さん、お母さんが子どもの体験を通して知ること大事		
双方向な関係性の構築	幼児の喜ぶ姿	・子どもたちがこのロケーションを、わあーって目で見て感動してね ・バスをチャーターしてみんなで移動するのが、わずか10分程度ですけど喜んでね、 ・コロナ前は、文化祭で幼稚園さんが「焼き芋いかがですかあ」って売り子して喜んでたからね	
	保育者と思いや願いの共有	・保育所の先生とも、一週間前くらいから「晴れるといいね、晴れるといいね」って言ってね ・先生方とは、感動を分かち合うからね	
	保育者と幼児から感謝	・先生も子どもたちも「ありがとう」って言ってくれますからね、うれしいですよ ・「ありがとうございました」って言ってくれる	
	継続的な関わりが生む双方向な関係性の構築	・年間通じて色々な事に繋がるとけっこう子どもの名前も覚えてくるから ・餅つきにも行くし、子ども達にシジミのおっちゃん、芋のおっちゃんと言われたりするからね ・幼稚園は収穫祭とかおっしゃって、夏野菜を料理して園に招いてくれるんですよ、 ・文化祭とかで展示されたこの活動を描いた子どもの絵を見ると、またお年寄り元気ももらう	
保育者や保育活動のサポート	他機関等とのコーディネート	保育園・幼稚園	・渚公園でシジミ採りすると、3園の来年少学校が一緒になる子ども同士が会えるんですよ
		漁協組合	・先生方だけでは漁協と連携は普通あまりできないですよ ・シジミも提供してもらってるしね
		社会福祉協議会	・バスのチャーターをお願いしてまでってのは、あまりないと思う ・事前に宍道湖に子どもたちが入りやすいように整備もお願いしてるんですよ ・社協だよりで地域と繋がってもらってる
		婦人会	・婦人会のお年寄りたちがお味噌汁とかおにぎりとか作ってくれて、みんなで食べてましたね
		中学校	・H中学校の美術部の子どもたちが、今日やった「スモウアシコシ」の紙芝居作っているからね
		地域の文化祭	・幼稚園と文化祭をつなげるってのも、いいんじゃないかな ・子どもが文化祭で地域と繋がると、保育者もその後いろんなマンパワーがもらえるしね
	サポート	時間やサービスの提供	・芋掘りってその園だけで完結するのは本当に大変なこと、時期や大人の人数もあるし、 ・文化祭の焼き芋は、朝6時起きで朝から仕込んで3日間、結構大変なんです ・シジミ採りの1週間前からバタバタして、前日に給食で食べるシジミを各園に届けたりね
リスクやハザードの管理	・シジミ採りは、先生方だけでは、ちょっと無理じゃないかな、安全のこともあるし ・我々は近い存在になってるから、近い存在になると安心して安全を任せてもらえると思うよ		
地域の愛着を育てるコミュニティづくり	地域の愛着の継承	・地域の宝である宍道湖やヤマトシジミは生産量が日本で一番、子ども達に是非知ってほしい ・宍道湖七珍や飛行機が飛ぶロケーションが素晴らしいんですよ	
	子どもの成長は地域の宝	・子どもは地域の宝っていうのがまずあって、我々は特に子どもに感動を残したいっていうかね ・大きくなってこの地域に留まって、次は我々を支えて欲しいというのものもあるかなと	
	核家族を高齢者が支える重要性	・今この辺は核家族が多くてじいさん、ばあさんと生活する人が半分くらいだと思うんですよ ・とにかくじいさん、ばあさんと、わあわあ大騒ぎすることは子ども達にとって有意義なこと ・若いお父さん、お母さんが子どもを通して地域の伝統を知っていくってこともあるから	
	住民の繋がりと支え合い	・人が繋がって、支えられてるってみんなが感じるのがいいと思う ・子どもが年寄りとか何かをするのが楽しいって思ってくれるから、中学生になっても続いてて ・子どもにお年寄りも元気をもらって、いろんな所で繋がりができる	
	コミュニティセンター中心の子育て環境づくり	・コミセンを中心いろんな形で地域の子育てに関わっていけるよ、ということを知らせたい ・コミセンの活動は我々がおって、保育者やPTA、子どもや各専門部の高齢者や若者達がおって	
世代継承性の向上・増加	楽しみや喜び・生きがい	・なんでも面白いことをしてみたいって時に声をかけてもらって ・みんなであわあ、ってやるのが楽しみ、関わっているのが嬉しいですね ・自分も子どもたちも楽しんでいけば、いいかなっていうのもありますかね	
	他者からの評価の受け止め	・保育者も子どもたちも「ありがとう」って言ってくれるからね ・「ありがとう」と言われるから地域の役に立っているんだらうなっていう意識はある ・評価されることは嬉しいが、そんなこと考えずに ・他の人が判断することだと思って	
	感謝と恩返しボランティア精神	・幸せな人生を過ごさせてもらったので、これからは世の中に恩返し・恩送りをしたい ・大変だけど、とにかく我々がまず楽しんで、こんなものだって思ってるよって	

「語り6・7」は、研究のプロフィールとして示した「シジミ採り」の内容が語られ、この活動が、〈幼児〉だけではなく、〈若い保育者〉や〈保育者集団〉である〈保育者〉にとっても、貴重な地域の自然体験の学びの機会になると考えられていると言える。また、「語り1」や表5に示した通り、若い〈保護者〉が子どもの体験を通して知ることも大切に考えられていることから、この「Sコミュニティセンターの自然を活かした世代間交流」の活動は、参加した幼児・保育者・ボランティアスタッフだけでなく、保護者も含めた多世代が、持続可能な社会の創り手として地域の人的資源であるコミュニティセンターの高齢者やH漁業組合の漁師等から地域における環境観や自然や環境保全等の知識を次世代に伝承する、SDGsに関わる多層的な活動意義を持つことが推察できる。

## 2. 喜びや感謝の共有が生む双方向の関係性の構築

このカテゴリでは、小カテゴリとして〈幼児の喜ぶ姿〉〈保育者と思いや願いの共有〉〈保育者と幼児から感謝〉〈継続的な関係性が生む双方向の関係性の構築〉の4項目を抽出し、代表者は次のように語られた。

語り8：

子どもたちがこのロケーションを、わあーっていう目で見て感動してね。バスをチャーターしてみんなで移動するのが、わずか10分程度ですけど喜んでね。

語り9：

コロナ前は、文化祭で幼稚園さんが、「焼き芋いかがですかあ」って売り子して喜んでたからね、

語り10：

保育所の先生とも、一週間も前くらいから「晴れるといいね、晴れるといいね」って言ってね。先生方とは、感動を分かち合うからね。

「語り8・9」からは、ボランティアスタッフである地域の高齢者が、この世代間交流を通じて見られる〈幼児の喜ぶ姿〉を自らの喜びと感じ、〈保育者と思いや願いの共有〉(語り10)をしていることが分かる。

語り11：

先生も子どもたちも「ありがとう」って言ってくれますからね、うれしいですよ。

語り12：

年間を通じて色んな事に繋がっているとけっこう子どもの名前も覚えてくるから、ほら、餅つきにも行くし、子ども達にシジミのおっちゃん、芋のおっちゃんって言われたりするからね、幼稚園は収穫祭とかおっしゃって、夏野菜を料理して園に招いてくれるんですよ、その後園でまた遊んだりしてね、

語り13：

コミセンや社協（社会福祉協議会）が広報してくれるし、文化祭とかで展示されたこの活動を描いた子どもの絵を見ると、またお年寄り元気をもらう。

地域に住む人々と協同で行う実体験を豊富にすることは、双方向の関係を構築する<sup>17)</sup>。ボランティアスタッフである地域の高齢者が、保育者と共に地域の子どもの育む実体験を積み重ね、継続することを喜びとすることで、〈保育者や幼児から感謝〉(語り11)の言葉を伝えられていることから、両者のあいだには双方向の関係が構築されていると考えることができる。

また、「語り12」からは、この年間を通じた活動が〈継続的な関わりが生む双方向の関係性の構築〉を実現させることで、地域の高齢者であるボランティアスタッフと幼児が、互いを名前や愛称で呼び合ったり、園における新たな保育活動(収穫祭)の計画に繋がる契機となったりしていることが推察できる。

次に、「語り13」からは、この交流活動の様子が社会福祉協議会から発行される広報紙や、コミュニティセンターの文化祭で展示される参加幼児が描いた絵に表されることで、地域全体の高齢者の目にも触れ、その元気の源にも繋がる大切な活動だと考えられていることが分かる。

## 3. 保育者や保育活動のサポート

ここでは、中カテゴリ2項目と小カテゴリ8項目を抽出した。中カテゴリ〈他機関等とのコーディネート〉に、〈保育園・幼稚園〉〈漁業組合〉〈社

会福祉協議会)〈婦人会)〈中学校)〈地域の文化祭)の小カテゴリー6項目, その他中カテゴリー≪保育のサポート≫に, 小カテゴリー〈時間やサービスの提供)〈リスクやハザードの管理)2項目を抽出した。

語り14:

渚公園でシジミ採りすると, 3園の来年小学校が一緒になる子どもたち同士が会えるんですよ。入学して, それを感じるかは分からないけど, 会ったときに, シジミ採り一緒にやったなあと思ってほしい。

語り15:

おそらく, 先生方だけでは漁協(漁業組合)と連携は普通あまりできないですね。シジミも提供してもらってるしね。

語り16:

社協(社会福祉協議会)から, バスのチャーターをお願いしてまでってのは, あまりないと思う。事前に穴道湖に子どもたちが入りやすいように整備もお願いしてるんですよ。

語り17:

コロナでなくなってますけど, それまでは婦人会のお年寄りたちが, お味噌汁とかおにぎりとか作ってくれて, (シジミを採った後)みんなで食べてましたね。

語り18:

H中学校の美術部の子どもたちが今日やった「スモウアシコシ」の紙芝居作っているからね。

語り19:

子どもたちが焼き芋の売り子をするんだけど, 幼稚園と文化祭をつなげるってのもいいんじゃないかな。子どもが文化祭で地域と繋がると, 保育者もその後いろんなマンパワーがもらえるしね。

ここでは, この研究のプロフィール「シジミ採り」について詳しく語られ, 小カテゴリーを形成する項目〈保育園・幼稚園)〈語り14), 〈漁業組合)〈語り15),

〈社会福祉協議会)〈語り16), 〈婦人会)〈語り17), 〈中学校)〈語り18), 〈地域の文化祭)〈語り19)は, Sコミュニティセンター役員らが持つ, 地域のソーシャルネットワークを形成する≪他機関等とのコーディネート力≫によって繋がりが, 他機関からサポートを受けることでこの活動が支えられていることが推察された。

また「語り19」の「子どもが文化祭で地域と繋がると保育者もその後いろんなマンパワーをもらえるしね」からは, 保育者も地域の文化や行事にふれることで, 地域資源に関わるソーシャルネットワークを構築することは重要であり, この活動はその契機になると考えられていることが推察される。

語り20:

芋掘りってその園だけで完結するのは, 本当に大変なこと, 時期や大人の人数もあるし,

語り21:

文化祭の焼き芋は, 朝6時起きで朝から仕込んで3日間, 結構大変なんですよ。(中略)でも, その売り子も子どもがしてくれるけど, それを全部園でするのは難しいんじゃないかな。

語り22:

シジミ採りの1週間前からバタバタして, 前日に給食で食べるシジミを各園に届けたりね

語り23:

シジミ採りは先生方だけでは, ちょっと難しいんじゃないかな, 安全のこともあるし。我々は, 近い存在になってるから, 近い存在になると安心して任せてもらえると思うよ。

また, 「語り20・21」は「サツマイモのツル植え, 焼き芋づくり, 文化祭における焼き芋の販売」, 「語り22・23」は「シジミ採り」について語られ, 「語り20・21・22」からはいずれもSコミュニティセンターのボランティアスタッフが心をかけ, 〈時間やサービス)を提供することによりこの活動が成り立っているといえる。一方, 本研究のプロフィールである「シジミ採り」においては, 湖(水)に関わる環境が設定されているため, 特にボランティアスタッフの人員確保やロープの設置と見守り等による〈リスクやハザード

下の管理〉(語り23・図5)が徹底していたと考える。また、前述したように社会福祉協議会からの補助金・バスチャーター代・宍道湖の整備費、中学校(美術部製作「スモウアシコシ」の紙芝居)等から資金面や物的な援助を受けることで、円滑な活動となっていることが分かる。これらのことから、三園の保育者が地域の「核」となるコミュニティセンターやその役員と繋がり、地域の人的資源から多大な〈保育のサポート〉を受けていることが分かる。

#### 4. 地域の愛着を育てるコミュニティ・子育て環境づくり

このカテゴリーでは〈地域の愛着の継承〉〈子どもの成長は地域の宝〉〈核家族を高齢者が支える重要性〉〈住民の繋がりと支え合い〉〈コミュニティセンター中心の子育て環境づくり〉の5項目の小カテゴリーを抽出した。

語り24:

地域の宝である宍道湖やヤマトシジミは生産量が日本で一番、子ども達には是非知ってほしい。

語り25:

子どもは地域の宝っていうのがまずあって、我々は特に子どもに感動を残したいっていうかね。それで、大きくなってこの地域に留まって、次は我々を支えて欲しいというのもあるかなあと、

「語り24」からは、地域の宝であるヤマトシジミや宍道湖、出雲空港等について大切に語られ、この語りから、〈地域の愛着の継承〉もこの活動が掲げる目的の一つであると考えることができた。また、「語り25」は、〈子どもの成長は地域の宝〉であるとするコミュニティセンターボランティアスタッフの共通の認識について語られ、地域コミュニティのネットワークで子育てを支え、成長した子ども達が、次は地域を支える者となるよう世代間の循環が期待されていることが推察された。

語り26:

今この辺は核家族が多くて、じいさん、ばあさんと生活する人が半分くらいだと思うんですよ、調べちゃおらんけどね。じいさん、ばあさんとふれ

合うことが少ない子どもたちにとって、コミセンの活動を通じて一緒に芋の苗植えから、収穫…、それから、大豆も作って冬には味噌作りもしたりして、とにかくじいさん、ばあさんと、わあわあ大騒ぎすることは子どもたちにとって有意義なこと、大事じゃないかって思いがありますね、

語り27:

しめ縄づくりなんか、神様を迎えるっていうものだけど、若いお父さん、お母さんが子どもを通して地域の伝統を知っていくっていうこともあるから、

「語り26・27」からは、この地域に大企業進出とともに核家族世帯が増え、その子どもたちが高齢者と関わるのが少ない現状を憂い、〈核家族を高齢者が支える重要性〉について語られた。そして、この活動に関わることや、幼児や保護者自身が地域の高齢者に支えられている感覚を持つことは、子どもの成長に必要なだと考えられている。また、幼児が作った「しめ縄」を各家庭に持ち帰ることで、若い保護者が地域の伝統を知ることも大切に考えられており、多世代に地域の高齢者と築いた愛着を下支えに地域の生活や文化が伝わる教育的に意義深い活動であると推察できる。

語り28:

人が繋がって、支えられてるってみんなが感じるのがいいと思う。

語り29:

子どもが年寄りと何かをするのが楽しいって思ってくれるから、中学生になっても続いてて、子どもにお年寄りも元気をもらって、いろんな所で繋がりができる。

次に「語り28・29」からは、コミュニティを形成する〈住民の繋がりと支え合い〉の重要性について語られ、人と人が繋がり支え合う実感を住民誰もが持つことを大切に考えられていることが分かる。この地域では、小・中学生に成長した後も、コミュニティセンターのボランティアスタッフが地域の見守り活動を行う等、当該活動に参加した幼児と継続的に繋がっている。そのため、中学生になっても尚、地域の高齢者であるボ

ランティアスタッフと双方向の関係性が持続する子ども達が多く存在することも語られた。

語り30：

コミセンを中心にいろんな形で地域の子育てに関わっていけるよ、ということを知らせたい。

語り31：

このコミセンの活動は、我々がおって、保育者やPTA、子どもや各専門部の高齢者や若者たちがおって、

コミュニティセンターや公民館は、地域の住民が尊重し合いながら生活基盤を整え、人生を豊かにしていく役割を持つことや共に暮らす〈場〉を生み出す触媒の役割をもつ<sup>18)</sup>。この「語り30・31」からは〈コミュニティセンター中心の子育て環境づくり〉について語られ、Sコミュニティセンターを中心に、喜び合い、繋がり支え合うこの世代間交流活動は、参加者が互いを尊重する双方向の関係性を構築する。また、保育を地域に根差しながら共に暮らす場を育て、地域に愛着もつ子育て環境づくりが世代間を超えて循環する、言わばSDGsが掲げる「まちづくり」に基づく活動であることが推察された。

## 5. QOLの向上・世代継承性の増加

この項目では、小カテゴリーとして〈楽しみや喜び・生きがい〉〈他者からの評価の受け止め〉〈感謝と恩返しのボランティア精神〉の3つのカテゴリーを抽出した。

語り32：

サラリーマンは終わったので、なんでも面白いことをしてみたいって時に声をかけてもらって。みんなであわあ、ってやるのが楽しみ、関わられていることが嬉しいんですね。

語り33：

やる意義っていうところまで、考えたことがなかったけど、自分も子どもたちも楽しんでいけばいいかなっていうのもありますかね。

初めに、「語り32・33」からは、この活動が、まず

自分たちにとって〈楽しみや喜び・生きがい〉であると考えていることが多く語られた。

語り34：

ただ、保育者も子どもたちも「ありがとう」って言ってくれるからね、それを喜ぶ気持ちもあるし、何か役に立っているのではってことはありますけどね、

語り35：

やっていることを知ってほしい思いはあるけど、他の人が判断することだと思っていて。「ありがとう」って言われるから、地域の役に立っているんだらうなっていう意識はある。でも、評価されることは嬉しいが、そんなことは考えずに、とにかく楽しんでやっていきたいです。

次に「語り34・35」では、保育者・子ども・地域の人々等〈他者からの評価の受け止め〉について肯定的な評価を受けることを喜ぶ気持ちや、その自覚はあるものの、上記「語り32・33」で述べたように、自分の〈楽しみや喜び・生きがい〉が重要であることが繰り返し語られた。

語り36：

仕事が終わって、幸せな人生を過ごさせてもらったので、これからは世の中に恩返し、恩送りをしたい。というのが私の人生に対する考え方なんです。

語り37：

大変だけど、とにかく我々がまず楽しんで、こんなものだって思ってやって、

また、「語り36・37」からは、上述した「語り20・21・22」にあるように多くの〈時間やサービス〉を提供することに大変さは感じつつ〈感謝と恩返しのボランティア精神〉により、次世代へ継承することを楽しむことの大切さについて語られ、「健康感や生きがい感」を示す「QOLの向上や世代継承性の増加」と関連性があると推察される。また、これらの語りからは、「地域の核」となる地域全体を思いやることのできる心ある人材が源となることで、地域住民同士の協

同的な実体験を伴う多様な企画が保育現場にも浸透し「ESD＝地域に根差す保育」に繋がることや、思い思いやられる双方向の関係性が地域に伝播する可能性が推察された。

さらに、これらの語りからは、保育・幼児教育施設における幼児や保育者も地域の高齢者にとって地域資源となり、その関係性が地域に広がる(発達する)ことで、SDGs時代の自然と共生し社会と経済の発展が、共存し合う環境観を育み、その価値感を共有することや、安心感あるコミュニティづくりに繋がる可能性があることが推察できた。

#### IV. 総合考察と今後の課題

本研究は、Sコミュニティセンターの活動の視察や、役員3名の方にインタビュー調査を行うことで、抽出した5点のカテゴリーをもとに以下のように考察を行った。

まず始めに、S地区の保育・幼児教育施設三園と、Sコミュニティセンターを通じて地域の高齢者が「地域の自然を活かした世代間交流」を行うことは、SDGsが掲げる「自然」「教育」「まちづくり」「動植物」と関連が深く、多世代が地域資源に関わることで地域に愛着を持ち、地域の自然や社会の知識を体験的に学び伝承する場となる環境が構成され、SDGsの目標達成に有効で、重層的な活動であることが推察された。

次にこの活動は、ボランティアスタッフである高齢者のソーシャルネットワークによる他機関とのコーディネート力や、楽しみや生きがい、感謝や恩返し等の思いが内在化されたボランティア精神を基盤とした多くの保育者や保育活動のサポートがあってこそ成立するが、それは先導するスタッフらのQOLを向上させ、世代継承性を増加させると考えられている。また、この活動は参加者だけでなく、幼児の保護者や地域に住む高齢者等が、世代を超えて繋がり支え合うことで、双方向な関係を構築するため、地域に愛着を育てるコミュニティ・子育て環境を形成することや、保育を地域に根付かせ、持続可能な社会の創り手を育くむ可能性を持つことが推察できた。

しかし、今回の研究は、役員3名にしか焦点が当てられておらず、そこに本研究の限界がある。今後は当該活動に参加する三園の保育者に焦点を当て、保育・幼児教育現場サイドの捉えやカリキュラムについて調査を行う必要がある。また、今回の研究で、地域の

「核」となるコミュニティセンターやそこに所属する地域に愛着をもつ心ある高齢者のソーシャル・サポート<sup>19)</sup>により、このような地域の自然や社会に関連する体験的な学ぶ場が提供される条件が整うこと、そこで生まれる双方向の関係性を基盤にその地域の環境観や愛着等が、参加者や地域全体に内在化されていくことが推察されたため、その実態について調査し、検証していく必要があると考える。最後に、SDGs時代の保育者は地域の「核」となる人と連携・協働し、地域資源を積極的に活用しながら正統的周辺参加<sup>註5)</sup>を用いたアクセスにより共同参加者間に分かち持たれる保育環境を構成する必要がある。その際、自らも地域コミュニティの一員として関係性を発達させながら地域と繋がり、園児や園と共に人と人として地域から大切にされ、愛着関係を基盤に幼児と共に地域で育ち合うようなコミュニケーションスキルをもつことが大切にされていると考える。

#### 謝辞

本研究のために、快くインタビュー調査にご協力いただきましたSコミュニティセンター会長・副会長の皆さま、役員の皆さま、資料提供に快く応じてくださった職員の方に心より感謝を申し上げます。

#### 注

注1) 2017年6月「教育再生実行会議」の第十次提言では、自然体験活動を始めとした体験活動の推進や、学校・家庭・地域が連携・協働した教育力の向上が重要であるとされ、地域資源を活用した体験活動の推進が提言されている。また、学びに向かう姿勢や態度を育成する上で、「幼児教育」は極めて重要であると指摘され、家庭の教育的・経済的条件に関わらず、推進体制を作ることが求められている。

注2) 文部科学省資源調査分科会(第28回)配布資料「地域資源の活用を通じたゆたかなくにづくりについて」では、地域資源に厳密な定義はなく、「①非移転性(地域性)②有機的連鎖性③非市場性」の三点の特徴があり、具体的には「人材」「文化」「施設」「コミュニティ」「自然」等を指すと明記されている。

注3) Sコミュニティセンターの「地域の自然や環境を活かした世代間交流」は、「三世代交流」と「こどもクラブ」に事業費が分かれるが、両活動共に高齢者と三園の保育者・幼児が行う世代間交流であり、本研究を明らか

にするにあたり、事業費の差異は影響がなく、本文中で混乱が生じる可能性があるため、まとめ記述した。

注4) 宍道湖七珍「スモウアシコシ」とは、宍道湖で捕獲される代表的な7種の魚介類、ズキ・モロゲエビ、ウナギ、アマサギ、シラウオ、コイ、シジミの頭文字を取った愛称である。

注5) ジーン・レイブとエティンヌ・ウエンガーは、著書「状況に埋め込まれた学習」の中で、学習は実践共同体への参加度合いが増す過程とみなす正統的周辺参加理論を提唱している。

## 引用文献

- 1) 外務省 (2015) 我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ (国連文書A/70/L.1) (情報取得2022年10月30日)
- 2) 文部科学省：持続可能な開発のための教育 (ESD：Education for Sustainable Development). <https://www.mext.go.jp/uneSc o/004/13399 70.htm> (情報取得2022年10月30日)
- 3) 後藤由美 (2019)「領域」環境から考えるESD・SDGS教材の在り方についての一考察. 瀬木学園紀要. 15-57
- 4) 谷口一也 (2020) SDGS時代の幼稚園教育要領「環境」のあり方. 教育総合研究叢書. 13. 137-146
- 5) 高野孝子 (2014) Place Based Education 地域に根差した教育－持続可能な社会づくりへの試み. 海象社. 14-15
- 6) 西脇二葉 (2018) 持続可能な社会をつくる日本の保育－乳幼児におけるESD－. ESDの視点から見直す日本の保育史. かもがわ出版. 86-95
- 7) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説. 第1章6節幼稚園運営上の留意事項2家庭や地域社会との連携. フレーベル館. 133-135
- 8) 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説. 第2章 保育の内容 4保育の実施に関して留保すべき事項 (3) 家庭及び地域社会との連携. フレーベル館. 292-293
- 9) 井上美智子 (2020) 持続可能な社会を目指す0歳からの保育－環境教育に取り組む実践研究の歩み. 北王路書房. 2-6
- 10) 萩原元昭 (2020) 世界のESDと乳幼児期からの参画・ファシリテーターとしての保育者の役割を探る. 北王子書房. 18-20・72
- 11) 無藤隆 (2018) 我が国における「森と自然を活用した保育・幼児教育」の動向. 森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック. 公益社団法人 国土緑化推進機構. 風鳴舎. 33
- 12) 前掲 (7) 第2章 3歳以上児の保育. イ人との関わりに関する領域「人間関係」(イ) 内容13. 217
- 13) 徳田多佳子・請川滋大 (2021) 幼児と高齢者の世代間交流にみる保育者の意識変容. 日本女子大学院紀要. 家政学研究科. 人間生活学研究科. 27. 165-173
- 14) 田淵恵・三浦麻子 (2014) 高齢者の利他的行動場面における世代間相互作用の実験的検討. 心理学研究. 84. 632-638
- 15) 柴田卓・紫田千賀子 (2021) 地域の資源を活かした自然保育に関する研究. 郡山女子大学紀要. 57. 21-39
- 16) 前掲 (11) 汐見稔幸 (2018)「森と自然保育・幼児教育」によせて. 12-13
- 17) 中澤静雄 (2015) 通路から広場へ、双方向の構築-多様な人間関係体験の場としての地域. 児童心理「体験」からもたらす子どもの成長. 臨時増刊. 1008. 76-79
- 18) 牧野篤 (2019) 公民館をどう実践してゆくのか－小さな社会をたくさんつくる②. 東京大学出版. 54-65
- 19) 厚生労働省：e-ヘルスネット <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/exercise/ys-067.html#:~:text=> (情報取得2022年11月2日)

# Intergenerational exchange utilizing local nature" to nurture the creators of a sustainable society: From interviews with S Community Center executives

Funakoshi Miyuki\*

## Abstract

This study focused on the S Community Center's year-round "intergenerational exchange utilizing local nature and environment" and, based on interviews with board members, examined the significance of intergenerational exchange utilizing local nature and environment in the era of the SDGs.

As a result of analysis using the KJ method, the following key words were extracted:

(1) hands-on activities related to nature and society using local resources, (2) building interactive relationships, (3) supporting caregivers and childcare activities, (4) fostering community attachment and creating community and childcare environments, and (5) improving quality of life and increasing generational inheritance.

This activity is an activity that not only creates interactive relationships in the community and a secure community/child-rearing environment, but also increases the staff's own quality of life and generational inheritance. It was also found that these activities are multilayered activities that are effective for achieving the SDGs, and that they are activities that support childcare providers and root childcare in the community.

Keywords: SDGs, Intergenerational Exchange, Childcare and Early Childhood Education Utilizing Local Resources, Community Center, Environment Configuration

---

\*Osaka College of Social Welfare and Health, Department of Child Care and Education